

インド大乘仏教の最初期より後期にいたるまで、その思想形成に一貫して中心的役割を果たした文献に〈般若経〉経典群がある。本論文は、その〈般若経〉群の核となった『八千頌般若経』(以下『八千頌』)が、インド仏教の伝統内部においていかに理解され、伝承されてきたかを、8-9世紀に活躍した思想家ハリバドラの註釈書『現観莊嚴論光明』(以下『光明』)「第2章」の解説にもとづいて解明した秀作である。

論文は、研究編、テキスト編、訳注編の3部より成る。研究編第1章「序論」は、著者ハリバドラをめぐる歴史的状況、『光明』が註釈対象とする『八千頌』と『現観莊嚴論』との関係、両書にたいする諸註釈書の成立とそれらの相互関係、『光明』をめぐる先行研究とその問題点、これらの諸点をていねいに論じたうえで、『二万五千頌般若経』(以下『二万五千頌』)の綱要書である『現観莊嚴論』に沿って『八千頌』全体の逐語的解釈を試みるという、『光明』のもつ複雑な論述構造の意義を、般若経典解釈史の内的展開を掘り起す形で明らかにした。

この準備を踏まえて第2章「本論」では、『八千頌』の記述の内部に見られる齟齬あるいは矛盾の解釈、異系統の伝承間に生じる軋轢にたいする調停、さらには『八千頌』と『二万五千頌』の間に存在する背馳への対処など、註釈対象であるテキストにハリバドラが向かうさいの解釈学的態度を克明に解明した。バダントヴィムクティセーナやラトナーカラシャーンティなど、関係する諸思想家の難解なサンスクリット語、チベット語テキストを入念に解説しつつ、〈般若経〉についての伝統内在的な解釈史を提示しえた意義は大きい。

第二部のテキスト編において、著者はこれまで未使用だった『八千頌』、『光明』の貝葉写本を用いながら荻原校定本への訂正を施し、第三部の訳注編においては、未出版のヴィムクティセーナによる註釈を参照しつつ、テキスト異読の採用根拠を示しながら邦訳をなした。異時代、異系統の写本を有する『八千頌』、『二万五千頌』、『現観莊嚴論』という三テキストを註釈対象として抱える『光明』を校訂するには、熟慮された方針が立てられていなければならないが、著者は「祖形の復元」ではなく「流布本の再構成」という目標に向かって、きわめて自覚的に作業をなしている。

ハリバドラが引用する推論式を理解や、『光明』第二章以外の箇所を示された関係する議論の理解など、再考を要すべき点や、今後考察範囲の拡大が望まれる箇所も存するものの、本論文は学界に寄与するところ大きく、審査委員会は博士(文学)を授与するに値するものと判断する。